OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『見出された時』冒頭に関する考察 : タンソンヴィル滞在か、タンソンヴィルの部屋の描写か
Author(s)	平光, 文乃
Citation	Gallia. 2023, 62, p. 75-90
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91100
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『見出された時』冒頭に関する考察
—— タンソンヴィル滞在か、タンソンヴィルの部屋の描写か ——

平光　文乃

2019年に上梓した拙著 *Les chambres de la création dans l'œuvre de Marcel Proust*[1] において筆者は、『失われた時を求めて』成立における部屋の決定的な機能を明らかにし、その中で小説の構造に関して、特に各篇、部、章などの冒頭に、小説冒頭「不眠の夜の回想」で思い出された部屋が登場することでそれが実質的に支えられていることを示した。またこれらの冒頭の部屋の描写が、物語におけるその世界や、主人公—語り手の「私」の過去の一時期を象徴的に表象していることを論証した。第一篇『スワン家のほうへ』コンブレー2冒頭を締めくくるレオニ叔母の部屋、同篇第三部「土地の名—名」冒頭バルベックの部屋、第三篇『ゲルマントのほう』第二部第二章と第五篇『囚われの女』冒頭のパリの部屋がそれにあたり[2]、最後に最終篇『見出された時』冒頭が「私」のタンソンヴィルの部屋の描写から始まることを挙げ、この描写においては最終巻に相応しく「私」を創作活動へと向かわせる「時」の啓示が暗示されていると主張した。この冒頭部は研究者が通常依拠する1989年出版の「新プレイヤード版」に基づくものである。

しかし、2018年『失われた時を求めて』の日本語訳第12巻を出版した吉川一義氏により、最終篇冒頭の校訂の問題が提起されていた。氏は主人公の最後の滞在地ともいえる「タンソンヴィル滞在」のエピソードをすべて最終篇に収めるべく、篇をタンソンヴィル滞在から始めており、同部屋の描写はその冒頭部途中に登場する。この校訂は上記拙論への再考を迫るものであるため、本論においてこの問題を扱いたい。はたして最終篇はタンソンヴィル滞在からか、タンソンヴィルの部屋の描写からか。もし前者である場合、筆者の主張する部屋の描写が担う機能は存在するのか否か。まずは第一の問いについて、既存の各版概説を基に問題となる要素を整理し、件の箇所の綿密な草稿調査を行うことで検討したい。それを基に上記第二の問いを考察する。

『見出された時』冒頭に関する校正問題の整理

最終篇である『見出された時』はどこから始まるのか、言い換えれば、その前

1）2012年提出の博士論文「プルーストの作品における部屋の描写と創造行為に関する総合的研究」に基づき、最新の研究成果や新たな草稿研究を取り込み、2019年に上梓した（Ayano Hiramitsu, *Les chambres de la création dans l'œuvre de Marcel Proust*, Édition Honoré Champion, 2019）。また本稿は、科研費21K19984の助成を受けた「『失われた時を求めて』タンソンヴィルの部屋の生成と最終篇冒頭の校訂に関する研究」の成果である。

2）詳細については拙著参照。

篇『消え去ったアルベルチーヌ』（『消え去る女』）はどこで終わるのか、という問題を整理したい。この問いには歴代の校訂者が頭を悩ませてきた[3]。というのも、プルーストの死後残された草稿には明確な区切りが示されていないからである。この問いについては、二つの説が存在する。一方は、タンソンヴィルの部屋（住まい）の描写から始めるものである。これはプルーストの死後 1927 年、NRF 版出版に際し編者である弟のロベール・プルーストによってなされ、また先にも挙げた「新プレイヤード版」最終篇編者であるピエール＝ルイ・レイ、ブライアン・ロジャースを始め、ジャン・ミイ編フラマリオン出版のガルニエ・フラマリオン版（1986 年ジャン・ミイ編『逃げ去る女』／ 2011 年ベルナール・ブラン編『見出された時』増補版）、ナタリー・モーリアック・ダイヤー編の『逃げ去る女』リーブル・ド・ポッシュ版（1993 年）、そしてリュック・フレースが編者となり 2017 年に刊行されたクラシック・ガルニエ版などにおいても踏襲されてきた。

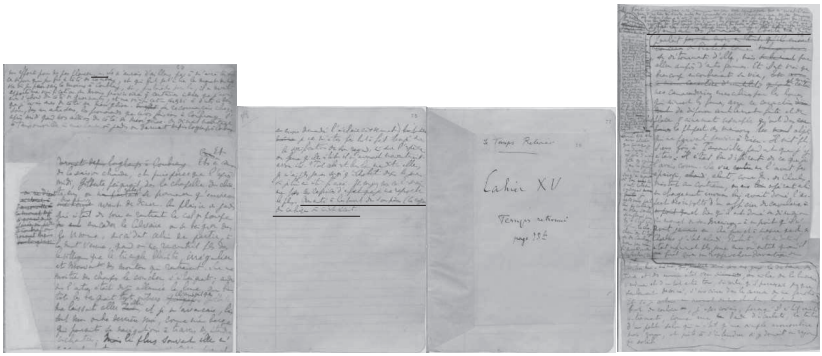
もう一方は、主人公の最後の滞在地ともいえる「タンソンヴィル滞在」のエピソードをすべて最終篇に収めるべく、篇をタンソンヴィル滞在から始めるものである。これは 1954 年出版の旧プレイヤード版において採用され、先に述べたように 2018 年吉川一義氏により改めて提唱された。氏の「訳者あとがき」によればこの校訂作業は、小説において主人公の滞在地の変化が篇、部、章の変更に対応していることによるものであり、旧来の版が第六篇と最終篇の区切りをタンソンヴィル滞在の途中に設定しているのは「魔訶不思議」だという。

また内容から考えても、このタンソンヴィル滞在のエピソードが最終篇の冒頭にふさわしいと氏は考える。理由としては、小説冒頭の不眠の夜の回想に現れ、予告されていた、かつてのコンブレーと現在のタンソンヴィルの散歩の対比が登場し、最初の土地であるコンブレー、かつ小説構造上も第一篇第一部「コンブレー」への回帰が示されている点、さらに、タンソンヴィルでのジルベルトとの

3）プルーストの作品については以下の版を参照した。
Marcel Proust, *À la recherche du temps perdu*, texte établi et présenté par Pierre Clarac et André Ferré, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1966-1968, 3 vol.（略号 PL。以下各著書末尾の括弧は略号）。
——, *À la recherche du temps perdu*, sous la direction de J.-Y. Tadié, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1987-1989, 4 vol（NPL）。
——, *La Fugitive : Albertine disparue*, présentation de Jean Milly, Flammarion, «GF», 1986（GF/Milly）.
——, *Le Temps retrouvé*, présentation par Bernard Brun, Flammarion, «GF», 2011（GF/Brun）。
——, *La Fugitive : Cahier d'Albertine disparue,* texte établi, présenté et annoté par Nathalie Mauriac Dyer, Librairie générale française, «Le livre de poche», 1993（NMD）.
——, *Albertine disparue*, édition de Luc Fraisse, Livre de poche, «Classiques», 2009（LF）.
——, *La Fugitive*, édition de Luc Fraisse, 2017, Classiques Garnier.（CG）
マルセル・プルースト『失われた時を求めて』吉川一義訳、岩波書店、2010-2019 年、14 巻。
また本章における主な参考文献は以下の通り。
Bernard Brun, «Le dormeur éveillé», *Études proustiennes IV*, Gallimard, 1982, p. 241-316.
——, «Étude génétique de l'"ouverture" de *La Prisonnière*», *Études proustiennes VI*, Gallimard, 1987, p. 211-287.
Kazuyoshi Yoshikawa, *Études sur la genèse de* La Prisonniere *d'après des brouillons inédits*, thèse de doctorat à l'Université de Paris-Sorbonne, 1976.
吉田城『『失われた時を求めて』草稿研究』平凡社、1993 年。

会話の中で、小説全体においても重要な二つの方、「メゼグリーズの方（スワン家の方）」と「ゲルマントの方」という二つの散歩道が実はつながることが示され、二つの方の統合が示される点である。

一方、ロベール・プルースト、新プレイヤード版他の編者がタンソンヴィルの部屋の描写を最終篇冒頭とした理由についてだが、理解を容易にするため印刷稿の基となった、プルーストが最後まで手を入れたとされる清書原稿 «Cahiers de la «mise au net»»、カイエ XV の問題個所を参照する（清書原稿についての概略は注の通り [4]）。カイエの用紙一葉（表裏二ページ）はフォリオ «folio» と呼ばれ、通



カイエ XV f°69r°（68v° 空白） f°75r°（74v° 空白） f°76r°/ 77r°（76v° 空白） f°78r° paperole ouverte（77v° 空白）

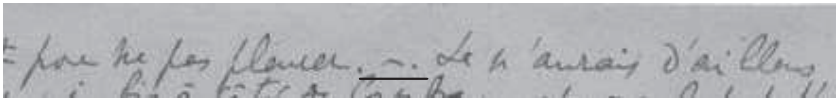
4）«Cahiers de la «mise au net»» と呼ばれるローマ数字で番付された 20 冊のカイエは、『失われた時』の後半第四篇『ソドムとゴモラ』から最終篇『見出された時』に相当する。第一次大戦の後半、1917 年から書かれ、大半は 1918 年 11 月までに執筆が完了していたと考えられ、1919 年 NRF 版の『花咲く乙女たちの陰に』の印刷時にその内容が予告されている。件のカイエ XV は新プレイヤード版他の区切りによれば途中まで（f°75r° まで）が『消え去ったアルベルチーヌ』、それ以降が『見出された時』とされ、そこにはタンソンヴィル滞在の後半部分とゴンクールの日記によって喚起された考察やゴンクールの日記の読書についての描写が含まれている。

最終カイエ XX には『見出された時』最終章、ゲルマント大公邸でのマティネの «Bal de tête» と呼ばれる老いにより変装したように見える招待客が描かれ、最終ページ f°125r° の最下部には「完」«Fin» と刻まれている。また、自分の死による小説執筆・出版の中断を恐れていたプルーストは、生前たびたび自分の死後の作品に関する指示を残している。リュック・フレースも紹介するように、1917 年の書簡においてすでに作家は自分の死後、『失われた時』を出版できるよう指示を残していたことが分かっている（LF, p. 26）。ゆえに、不完全ながらも『失われた時』は完結していたと考えられている。

しかし例えばカイエ XV のゴンクールの日記に関する考察と読書の順序が頁を付け直すことによって逆にされていることが示すように、新プレイヤード版でもカイエ XV ～ XX まで大半の物語のつなぎ方に迷いが見られるとも指摘される（NPL, t. VI, p. 1177）。また、プランも最終篇を構成するカイエについては、その非連続性と不完全さに驚くと述べている（GF/Brun, p. 40）。

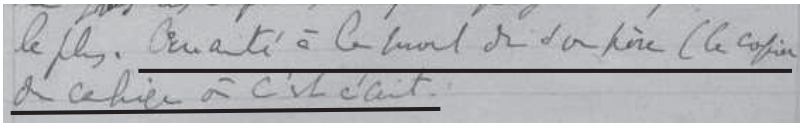
これらの清書原稿をもとに『ソドムとゴモラ』はタイプ、校正、出版され、『囚われの女』と『消え去ったアルベルチーヌ』の一部はプルースト生前である 1922 年 11 月以前にタイプ原稿にされ、プルーストによる修正を受けたとされる。『見出された時』は弟ロベールによってタイプ原稿が作成された。『消え去ったアルベルチーヌ』のタイプ原稿についての複雑な問題やロベールの恣意的な編集については、モーリアック・ダイヤ―の解説や吉川訳 12 巻

常プルーストはまず右ページ «recto» を埋め、推敲や加筆を欄外の余白、行間、そして左ページ «verso» を使っていったと言われる [5)]。本論では通例に倣い、頁表記を、例えばフォリオ 69 レクトを «f°69r°» のように示す。



カイエ XV f°69r° 拡大図

カイエ XV f°69r° の張り付けた紙の加筆部分において、ティルドと呼ばれる波線 « ⁀ » を挟んで吉川氏が最終篇冒頭とするタンソンヴィル滞在のエピソードが始まる。紙を切り貼りするなどの加筆修正を施した原稿が続き、f°75r° においてジルベルトとの会話前半の最後に「彼女の父の死に対する残酷さ（そのことが書いてあるカイエからコピーすること）」«Cruauté à la mort de son père（le copier du cahier où c'est écrit.» との覚書きのメモが書かれている。



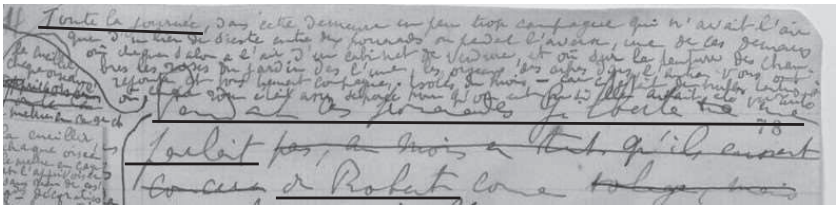
カイエ XV f°75r° 拡大図

しかし、このテクストは見つかっておらず、f°75r° の残りのページ、そして続く見開きページ（f°75v°-f°77r°）は空白のまま残されている（この見開きには、弟ロベール・プルーストの手によると言われる「見出された時」というタイトルページ（f°76r°）が貼り付けられている）。

その後左側のページを空けた f°78r° には「こうした散歩の途中ジルベルトはロベールについて話した」«Pendant ces promenades Gilberte me parlait de Robert» から文章が始まっているが、その前に «Toute la journée» から始まるタンソンヴィルの部屋の描写が余白に加筆される形で挿入されている。

あとがきに譲り、詳しい説明は控えるが、本章で問題となる『消え去ったアルベルチーヌ』末と『見出された時』冒頭については、タイプ原稿よりも清書原稿を参照すべきであると考えられる。

5）また一冊のカイエを上下逆さまにして裏側から使用したり、文章を移動させるためページの一部または全部を切り取って別の所に張り付けたり、余白がなくなると付箋を張り付けたりした。



カイエ XV f°78r°　拡大図

ここで改めて、新プレイヤード版他の編者がタンソンヴィルの部屋の描写を最終篇冒頭とした理由だが、以下大きく三つ挙げられる。第一に、タンソンヴィルの部屋の描写によって、「タンソンヴィル滞在」のエピソードである「私」とジルベルトの会話が二分されていることである。この清書原稿の基となったカイエ 55 では、このエピソードは一塊に書かれていた。旧プレイヤード版編者は清書原稿 XV 以前の草稿を見ることができず、この二分化を知らなかったとして、新プレイヤード版編者はこの二分化を第六篇と最終篇の区切りとしてとらえている [6)]。

また上述の区切りとも関連するが、カイエ XV のタンソンヴィルの部屋の描写の間には白紙（2 ページ）が存在するが、それをティルドよりも相応しい草稿の区切りとしてとらえているためである。新プレイヤード版には、プルーストが『ゲルマントの方』第二部第二章の区切りとして、プラカール «placard» と呼ばれる棒組の校正刷り（1 枚に 8 頁掲載）、«placard 27» において、章の区切りとして、空白を残しておくようにという指示を書きつけた例も紹介されている [7)]。

最後に、筆者も主張する冒頭における部屋の描写という構造性のためである。既に述べたように小説冒頭における不眠の夜の回想で、主人公―語り手は幼年期から中年期に至る全ての部屋を思い出すことにより、『失われた時』の物語が開始される。そしていわば目次をなす各部屋に対応するように篇や章などの冒頭におかれた部屋の描写が、様々な時期の「私」の世界を象徴・提示するという役割を担っていると考えられる。新プレイヤード版では、こうした外界の反映としての部屋の描写や部屋での瞑想という特徴が、『ゲルマントの方』第二部第二章冒頭や『囚われの女』冒頭の部屋の描写に重なると指摘する [8)]。また、GF 版の最終二巻の編者であるジャン・ミイ、ベルナール・ブランもこれらの描写の共通点をそれぞれ「序曲」«ouverture» や、朝／夜の部屋における「半覚醒者」«dormeur éveillé» の構図、という語を用いながら、同様の主張をしている [9)]。

滞在地の統一や小説冒頭の二つの散歩との対応関係、また二つの方の統合という点で吉川氏の主張は説得的である。しかし、疑問も浮かんでくる。カイエ XV の空白を区切りとしないのは妥当なのか、タンソンヴィル滞在のエピソードは確

6）NPL, t. VI, p. 1034.
7）NPL, t. II, p. 1710. しかし吉川氏は空白について、「プルーストが加筆の紙片を貼りつけた場合など、（草稿には）いくらでも出て」くるとして、篇の区切りとは認めていない。
8）NPL, t. IV, p. 1171.
9）GF/Milly, p. 34 ; GF/Brun, p. 42.

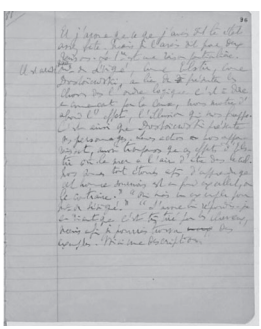
かに二分されているが、これは何を意図したものか。また、それを引き起こす挿入されたタンソンヴィルの部屋の描写は何を意味するのか。冒頭におかれた部屋の描写による機能がそこにあるのか。さらに、二つの方の統合はジルベルトによって「私」に示されているが、その直後才能の欠如を自覚した「私」の悲嘆が強調されている点も疑問である（「[...] この言葉は、私の少年時代の考えを全て覆し、この二つの方は私が思いこんでいたほど相容れないものではないと教えてくれた。しかし私に最も衝撃を与えたのは、この滞在中、私がかつての歳月をほとんど追体験できず、コンブレーをもう一度見たいとも思わず、ヴィヴォンヌ川を貧弱で醜いと思ったことである」（NPL, t. IV, p. 268））。主人公が目指す文学創造への啓示は結末にとっておかれるべきものではあるが、なぜここでこれほど才能の欠如が強調されるのだろうか。

以上のように、最終篇冒頭はタンソンヴィル滞在からか、同部屋の描写からか、という重要な校訂作業の問題が再び提起され、さらに上述の様々な疑問が生じた。先に述べたようにこの問題は、筆者の主張する部屋の描写の役割、またそれが担う小説の構造にも密接に関わっている。そこでこれらの問題について、草稿調査等により明らかにしたい。

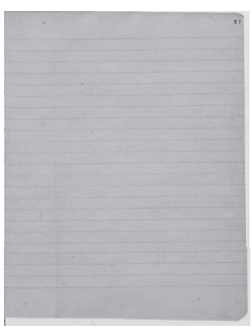
しかしここで結論を先取りすると、本論では『見出された時』冒頭をどちらかに決定づけるには至らなかった。調査を進める中で、どちらの説にも説得的な要素を見出したためである。そこで本論では問題を検討したうえで、双方の主張に筆者の見解をそれぞれ付け加えたい。そうすることで、拙著でこれまでに取り組んできた『失われた時を求めて』の部屋の描写に関する考察を深めることができると考える。

草稿調査による問題の検討：形式的区切り

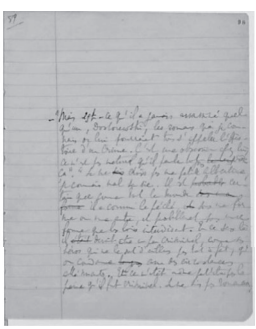
問題の清書原稿について、まずは形式的な区切りについて検討したい。タンソンヴィル滞在の始まりは、前述のようにティルド « ⁀ » が挿入されている。この



カイエ XI f° 96 r°（95 v° 空白）



f° 97 r°（96 v° 空白）



f° 98 r°（97 v° 空白）

※文が改行後つながる（NPL, t. III, p. 881）：第三タイプ原稿（NAF16747 f°176r°）や吉川訳では改行無し（吉川訳 11 巻 433 頁）。

記号はプルーストの草稿にはよくあるとされ、またジャン・ミイも改行を示す際に用いられたとするが、清書原稿において、篇や章などの区切りとなるべき場所にティルドが挿入されている箇所は他に見当たらない。また、ミイは篇の区切りとしてこの記号はささやかすぎると述べている[10]。

しかし、空白もまた決定的な区切りとなるわけではない。例えば『囚われの女』にあたるカイエ XI f°96r° から f°98r° においては、f°96r° 下部、f°97r° の 1 ページ、f°98r° 上部の空白ののち、改行を伴い文章が続いている（NPL, t. III, p. 881）。このカイエはプルーストの生前にタイプ、修正された原稿の基となった草稿であり、清書原稿における空白が大きな篇や章の区切りとして必ずしも機能していなかったことを示している。

他にもカイエ XIIIf°3r°-f°8r°（『消え去ったアルベルチーヌ』）など、空白後に文章のつながる同様の例が存在する（NPL, t. IV, p. 96）。またブランは、こうした空白を断片挿入のためとしている[11]。件のカイエ XVf°75r° 下部～f°77r° までの空白も、先に述べたジルベルトの父に対する残酷さについての断片を挿入するために空けられていたと考えられる。ゆえに、空白が決定的な区切りとは言えない。

また、これらの清書原稿とプルーストの生前に作成、修正されたタイプ・校正原稿を比較すると、清書原稿には主に区切りは示されず、タイプ原稿等にプルーストが手を加える形で巻や章の区切りがなされていることがわかる。例えば『ソドムとゴモラ』第一部の冒頭は、タイプ原稿に清書原稿から写された冒頭 6 頁をバツ印で削除し、7 頁目に冒頭を描いた紙を貼り付けている。また『ソドムとゴモラ』第一部と第二部については、清書原稿は途中で中断され、校正原稿の 1 ページ目に貼られた紙に冒頭が描かれている。

以上のことから、プルーストによる指示が特に示されていない限り、ティルドも空白も篇や章などの区切りを決定づけるものではないといえる。ゆえに新プレイヤード版その他の第二の根拠には正当性がないと結論付けられる。

草稿調査による問題の検討：内容による区切り

次に内容面から検討する。そのため、タンソンヴィル滞在に関連する主な草稿、カイエ 50、カイエ 55、清書原稿 XV についてみていきたい。タンソンヴィル滞在については、1913 年 11 月出版の『失われた時』第一篇『スワン家の方』冒頭において幼年期のコンブレーでの滞在に比較される形で登場し、小説末尾がすでに予告されている。

> というのも長い年月が経ってしまったがコンブレーでは、どんなに帰宅が遅くなっても、私の窓ガラスに見えていたのは赤い夕映えだったからだ。タンソンヴィルのサン＝ルー夫人宅で送っているのは、まったく別の生活で、夜散歩に出て、かつては日の光を浴びて遊んだ同じ道をいまや月明かりに照ら

10）GF/Milly, p. 34.
11）GF/Brun, p. 40.

されてたどるという、別の楽しみがあるのだ（NPL, t. I, p. 7）。

この滞在を告げる描写は、1911 年執筆のカイエ 50 に登場する。まずカイエ 50 f°63r° を見ていく（以下表参照）。

カイエ 50（1911 年 +1915 年の加筆）	カイエ 55（1915 年）	カイエ XV（1917 ～ 1918 年 11 月～ ※予告に示された内容、大戦への記述以外、加筆等については年代特定できず）
・（f°63r°） 海や山での治療の前、モンタルジ（後のサン＝ルー）に頼まれ、同夫人宅のあるラ・フラプリエールで過ごすことに。 (+)「私の部屋」（丘に面し、庭がその一部、丘に隠れている） 使用人が朝カーテンを開けに来る ・（f°62v°） 母の勧め（山で静養）で、ラスプリエールのモンタルジ夫人宅へ（※「私の部屋」と書きかけて削除）。 ＜以下筆跡異なり、1915 年の加筆か＞ ・（f°62v°, 63v°, 64r°, 65v°-65r°, 58v°） （滞在理由）サン＝ルーとジルベルトとの不幸な結婚 サン＝ルーの同性愛的側面の暴露 Cf : カイエ 1（1909 年春）: 城主夫人（ゲルマント夫人）との散歩 :（1909-10）再び散歩、同夫人との会話 : カルネ 3（1913-14）: サン＝ルーの変貌（f°45v°, 46v°-46r°, 47r°）; サン＝ルーの偽り（f°29r°, 30r°）	・ジルベルトとの会話（f°91r°, 92r°, 93r°）: 読書中の本 ゴンクールの『日記』（パパ（スワン）と知人について） 古いバルザック（ゲルマントの叔父にならって） 『金色の目の女』（※侯爵夫人が同性愛関係の娘を幽閉・監視。その娘が男性と恋に落ちると、夫人は娘を殺害） （→ジルベルトと「私」、「私」とアルベルチーヌとの関係を語る） 「私」は汽車で『日記』を取る。 (f°90v° 下）アルベルチーヌと「私」の婚約についての会話 (f°90v° 上） ＜プルーストによる指示＞ [...] もしこの一対をコンブレーでサン＝ルー夫人（ジルベルト）と共に置くなら、『金色の目の女』と一緒にはならないだろう、この本は削除か後にせねば。 ・結婚についてのジルベルトと私の会話 Cf : Cahier 59（1921-22）: サン＝ルーのモレルへの眼差し（f°75-77r°）※挿入されず	・「このしばらくあと、タンソンヴィルへでかけて数日すごした。」（※実際の滞在の描写はティルドの後）（f°55r°）（余白に加筆、前文から続く） ・現在の愛人との同居（貼紙加筆） ・（理由）ジルベルトの不幸な結婚 ・サン＝ルーの同性愛的側面の暴露 （⁀：ティルド f°69r°） ・コンブレーへの言及（不眠の夜の回想） ・ジルベルトとの散歩 ・才能の欠如の自覚（ゲルマントの方の確信）、悲嘆 ・ジルベルトが示す 2 つの方の統合（「メゼグリーズの方」と「ゲルマントの方」）（「私」は追体験不能） ・ジルベルトの性愛について（メゼグリーズの方の確信） （空白：f°75r° 下 -77r°） ・タンソンヴィルの住まい・部屋 コンブレーの鐘楼 ・ジルベルトの嘆き（散歩中） ・ロベールの変貌（同性愛） ・同性愛の例：アルベルチーヌ＝『金色の目の女』 ・コンブレーの教会への思い ・アルベルチーヌの同性愛について ・ゴンクールの日記（文学観の考察→目指す文学の自覚へ）

表にあるように、カイエ 50 において主人公の「私」は治療の前にモンタルジ（後のサン＝ルー）に頼まれ、同夫人宅のあるラ・フラプリエール «La Frapelière» で過ごすことにする（f°63r°）。一行空け、改行の後に「私の部屋は」から始まる丘に面する部屋の描写がなされる。この左ページ（f°62v°）に再び同滞在につながる、山で静養するようにとの母の勧めで、ラスプリエール «Rasplière» のモンタルジ夫人宅へ向かうことにしたとの同様の記述がみられる。しかしここでは「私の部屋」という文言が書かれるものの削除され、部屋の描写は存在しない。

さらに同ページには、文字の大きさなど筆跡の異なるプルーストによる 1915 年の加筆と言われる部分で、滞在の理由がモンタルジでなくサン＝ルーの名のもと、彼の同性愛的側面が明かされる。この加筆の同年執筆とされるカイエ 55 においては、主人公とジルベルトとの会話が描かれ、彼女が読書中である三冊の本、1）ゴンクールの日記、2）古いバルザック、3）金色の目の女についての会話が展開される。1）の日記には、ジルベルトの父とその知人について書いてあること、2）についてはバルザック好きのゲルマントの叔父にひけをとらぬために読むのだと語られる。そして 3）を発端として同性愛と、娘を幽閉、監視することについて話が及び、ジルベルトと主人公の「私」、また「私」とアルベルチーヌとの関係が語られる。最後は主人公が汽車の中で日記を取る、という描写で終わる。

カイエ XV については、f°55r° 「このしばらくあと、タンソンヴィルへでかけて数日をすごした」という描写の後に、カイエ 50、1915 年の加筆で示された滞在の理由、そしてサン＝ルーの同性愛の暴露が語られる。ティルドの後にはコンブレーについての言及がなされる。

> コンブレーの近くで滞在したものの、生涯でいちばんコンブレーのことを考えていなかった時期であったかもしれない、この滞在についてはこだわるべきではないのかもしれないが、コンブレーについて考えていなかったからこそ、ゲルマントの方で初め抱いたいくつかの考えに少なくとも一時的な確証がもたらされたのであり、メゼグリーズの方で抱いたべつの考えにも確証が得られたのである。かつてコンブレーで午後、家族でメゼグリーズの方へ出かけた時の散歩を、私は毎晩、反対の方向から再開することにした。（カイエ XV f°69r° ; NPL, t. IV, p. 266）

この描写に予告のようにまとめられているように、ここから『失われた時を求めて』冒頭と対の構造を成す、ジルベルトとの散歩が語られる。しかし強調されるのは、主人公の才能の欠如の自覚（ゲルマントの方の確信）であり、そのための悲嘆である。また、ジルベルトにより二つの方の統合が示されるも、「私」は追体験できないことを嘆く。そして散歩中にもう一つのメゼグリーズの方の確信として、かつてのジルベルトと私の関係、彼女の性愛について語られる。最後に前述の通りジルベルトのスワンに対する残酷さについて、という記述があるもののそれは示されず、f°75r° 下部 – f°77r° が空白として中断される。

f°78r° には、タンソンヴィルの住まいや部屋の描写が余白に加筆される形で挿入され、その後には、散歩中に語られたロベールに対するジルベルトの嘆きへと続く。同性愛によるロベールの軽やかな体つきへの変貌、そして同性愛や幽閉についてのテーマでアルベルチーヌが語られ、『金色の目の女』への言及がなされる。最後に、就寝前に読んだ本としてゴンクールの日記が取り上げられ、「私」は観察能力の欠如を認識しつつもタンソンヴィル滞在当初ほどそれを嘆くことはなく、文学観についての考察が促され、最終的には自分の目指すべき文学の自覚へと至る契機となる（「[...] ゴンクールの文章が私の内に生じさせた文学への異論は、とりあえずわきへ置いておこうと決めた。[...] じっくり見つめたり注意深く耳を傾けたりする能力の欠如は、引用した日記によってひどく痛感させられたのだが、それでも全面的な欠如ではなかった。私の内には多かれ少なかれじっくり見つめる術を持つ別の人物が存在したからである [...]」（NPL, t. VI, p. 296））。

またブランは、1909 年 4 － 6 月執筆のカイエ 1 また 1909 － 10 年の下書きのカイエにおいて、ジルベルトとの散歩の前身を成す城主夫人、ゲルマント夫人との散歩や会話が存在すると指摘している[12)]。このように見ると、ブランの言うように、カイエ XV は約 10 年かけてそれまでのカイエの様々な要素を取り込み、ほぼ一貫性のある構成を得るに至ったといえる。

1909 年のカイエ 1 にはすでに城主夫人との散歩が描かれ、また 1911 年のカイエ 50 では夫人宅での滞在が示され、『失われた時』冒頭と対を成す小説の末部を構成しようとしたことが分かる。そして 1915 年のカイエ 55 では、夫人宅滞在中の主要エピソードである、ジルベルトとの会話が大きく展開される。ここでは特に『金色の目の女』を契機に、後の「メゼグリーズの方の確信」と重なる彼女の性愛について、また彼女と主人公との関係が明らかとなる。よく指摘されるように、ジルベルトの存在は、彼女がスワンを父に持つブルジョワの娘として生まれ、最終的には大貴族ゲルマント家のサン＝ルー夫人となることで、二つの世界をつなぐ交差点であることを意味する。その彼女の会話が展開されることは、最終巻『見出された時』においてスワン／ブルジョワを示す「メゼグリーズの方」とゲルマント／貴族を示す「ゲルマントの方」として象徴される、これら二つの方の統合を図ろうとしたプルーストの小説構造上の意図を読み取ることができよう。

しかし同年のカイエ 50 におけるサン＝ルーに関する加筆同様、カイエ 55 の内容は、主人公が文学の啓示を受けて小説創造を決意する『見出された時』のテーマというよりもむしろ、消えたアルベルチーヌの同性愛を含む彼女の性愛についての調査を行うという『消え去ったアルベルチーヌ』の主題に類似する要素ともいえる。また、ゴンクールの『日記』がここではジルベルトの父スワンとの関りにおいて語られ、「私」の文学観についての考察という『見出された時』の主要テーマへとつながるのは、カイエ XV を待たねばならない。

カイエ XV では、治療や母の勧めについての言及はないものの、カイエ 50 同様の流れによって、タンソンヴィルで滞在することにした、という記述の後、その

12）GF/Brun, p. 43.

理由であるサン＝ルーとジルベルトの不幸な結婚、そして彼の同性愛に関する暴露がなされる。この部分は実際のタンソンヴィルの滞在ではなく、また最終巻というよりも、先に述べたように『消え去ったアルベルチーヌ』に相当する要素が色濃く示されている。

ティルドの後には、実際の滞在の描写が始まり、『失われた時』冒頭との対構造を完成する重要な要素であるジルベルトとの散歩が描かれ、そこでは『見出された時』の主要テーマである、二つの方の統合が実際に告げられる。

これらの構成要素をみれば、吉川氏も指摘する通り、タンソンヴィル滞在の描写が最終巻冒頭と構想されるのもうなずけるだろう。さらにこの主張に加えたいのは、カイエXVでコンブレーへの言及から始まる描写に基づく考察である。「コンブレーの近くで滞在したものの、生涯でいちばんコンブレーのことを考えていなかった時期であったかもしれない」というこの言及は、否定であるにせよ、タンソンヴィル滞在と幼年期のコンブレー滞在との対比を印象付けるものである。またさらに、コンブレーを起点とした回想の描写という「不眠の夜の回想」の枠組みを思い起こさせる。

この枠組みとは、拙著で論証したように『失われた時を求めて』冒頭に現れる不眠の夜の回想のことで、この回想に対応するように第一篇『スワン家のほうへ』第三部「土地の名―名」冒頭に置かれた、「不眠の夜に私がもっとも頻繁に思い浮かべたそれぞれの部屋の中でも、バルベック海浜グランドホテルの部屋ほど、コンブレーの各部屋に似ていないものはなかった」（NPL, t. I, p. 376）の表現が端的に示す通りである。さらにコンブレー1末尾、「こうして長いあいだ、夜中に目覚めて、コンブレーのことを回想していたときに、再び目に浮かんだのは［...］」（NPL, t. I, p. 43）さらにコンブレー2末、「そんなふうに私がしばしば明け方まで思い浮かべたのは、コンブレー時代のこと、眠れなかった悲しい夜のこと［...］」（NPL, t. I, p. 183）にもその同様の枠組みが見られる。

この枠組みが置かれることによりタンソンヴィル滞在は、幼年期のコンブレー滞在との対比が強く印象付けられる。またこれらの枠組みが部の冒頭や末尾に現れていることからも、この枠組みの区切りとしての機能がうかがわれる。ここに、プルーストの意図した、小説冒頭と対を成す最終巻冒頭の小説構造を読み取ることができるのではないだろうか。

一方で草稿の比較検討からは、タンソンヴィルの部屋の描写を冒頭とする説についても、さらなる根拠を見出すことができる。カイエ50においては丘に面し、丘に隠れているとのみ描写されていた、私の部屋の描写の変化である。

> 一日中、散歩の合間や夕立の雨宿りの間に昼寝でもする場所にしか見えないこのいささか鄙びた住まいでは、こうした住まいの一つでは、どのサロンも緑の木陰の東屋のようで、各部屋の壁掛けには、ある部屋には庭のバラが、別の部屋には木々の鳥たちがやってきて、人に付き添ってくれる［...］一日

> 中、私が一日中を過ごした部屋は、庭園の素晴らしい緑や、入り口のリラや、水辺で、日の光にきらめく大きな木々の青葉や、メゼグリーズの森に面していた。（カイエ XV f°78r° ; NPL, t. IV, p. 275）

この描写は既に分析したように、外界の反映としての部屋の描写や部屋での瞑想という特徴を持ち、篇や章の区切りに置かれるような、主人公―語り手のその時々の世界を象徴する描写ともいえる。というのもタンソンヴィル滞在は、ジルベルトとの散歩と、主人公が「一日中を過ごした」という部屋によって構成されていると言えるが、この部屋の描写がまさに緑の中の散歩と緑に囲まれた部屋で過ごした、タンソンヴィルの世界を象徴するからである。散歩の間の東屋のようなイメージ、また外の風景が室内装飾描写を通じて部屋の描写へとつながり、外と内とが混然となった描写にそれが表れている。そして最後には、コンブレーの鐘楼がそのガラス窓に姿を現す。

> 結局のところそれら全てを楽しく眺めていたのは、「いいなぁ、たくさんの緑が自分の部屋の窓にあるなんて。」とつぶやくためでしかなかったが、そのうちふと、青々とした広大な画面の中に気づいたのは、単により遠くにあるために、逆にくすんだブルーに塗られた、コンブレーの教会の鐘楼であった。この鐘楼の形象ではなく、この鐘楼そのものが、眼下にさまざまな場所や歳月の隔たりを置きながら、輝く緑と、それとは全く別の色調との間にやって来ていた。この色調があまりに暗いので、鐘楼はほとんどデッサンされただけのように、私の部屋の窓ガラスに刻み込まれているかのようだった。（カイエ XV f°78r° ; NPL, t. IV, p. 275-276）

この「さまざまな場所や歳月の隔たり」を置きながら現れる鐘楼には、「そうだ、そんな作品のことなのだ、私がようやくいだいた「時」の想念が、いよいよとりかかるときだと告げているのは。」（NPL, t. IV, p. 612）にあるように、最終的に「私」を創作活動へと向かわせる、「時」の啓示が暗示されていると考えられる。また『見出された時』末尾においても、コンブレーの教会が「時」を象徴するものとして、文学創造の啓示の予感として表現されている。「その時私は突然こう考えた。作品を完成する力がまだ私に残されているのなら、このマティネは［...］なによりもまず私の作品の中に、私が昔コンブレーの教会で予感した形、ふだん私たちの目には見えない形、つまり「時」の形を明確に示すことになるだろう、と」（NPL, t. IV, p. 621-622）。教会と「時」との結びつき、さらにそれによる文学的啓示との深い結びつきは明らかである。さらに言えば、件の部屋の描写の後のコンブレーの教会が自分を待っていてくれるように思われた、という描写にもその結末の暗示を見て取ることができるだろう（「コンブレーの教会は、すっかり紫色を帯びた窓のなかで緑に囲まれて私を待ってくれているように思われた」（NPL, t. IV, p. 285））。

ゆえに、カイエ 50 において『見出された時』の主要テーマとは内容的にはつながりをもたなかったこの部屋の描写は、それを象徴する描写として再構築されているのだと言えよう。しかも前半のジルベルトとの散歩においては、二つの方の統合が示されているにもかかわらず、強調されていたのが「私」の才能の欠如であり、追体験の不能という悲嘆であったのに対し、ここでは「私」の文学創造という結末を暗示させるのである。この点に冒頭の部屋の描写が担う、主人公の各時代を象徴するという機能の有効性を確認することができるだろう。

さらに部屋の描写と小説の構造性についても補強点を加えておきたい。新プレイヤード版編者が指摘するように[13]、カイエ 50 後半において小説全体の構成（関連付け）が試みられているといえるが、その多くが「私」の部屋での回想や瞑想をモチーフとしている点は注目に値する。f°39r° でタンソンヴィル滞在にもつながる、ジルベルトの結婚のエピソードが描かれた後に、f°40r° においては不眠の夜の回想の円環を閉じるような部屋での回想が現れる（「このようにして、眠らずに夜のひと時を過ごす際に、私のかつての生活のあれこれの情景を再び見ていた」「このようにして朝までよく過ごしたものだが、宵の口頃に目を覚ますと、私の生活のあれこれの時を思った」）。また、f°41r° から 58r° まで断片的にではあるが、後の『囚われの女』の 1 日目、2 日目、3 日目という、主人公―語り手の部屋の描写から始まる日々の描写が現れている。以下 1 日目の描写をカイエ 50 と決定稿より併記して記す。

> このわずかな光線をカーテンの上にちらりと見るだけでも、この光が現れるや否や生じるその暗さや明るさの度合いによって、その日の天気を知るには十分であったのだが、それすら必要なく（中断）しかし見る必要すらないのだった。（カイエ 50 f°41r°, NPL, t. III, p. 1096-1097）
>
> 朝になるとすぐに、まだ顔を壁に向けたままで、窓の大きなカーテンの上で、日差しの光線がどんな色合いか見届ける前に、もう私はどんな天気であるかがわかっていた。（NPL, t. III, p. 519）

以上の描写は、拙著において『失われた時を求めて』における小説の構造を担う、篇や章冒頭、末尾に置かれる、として主張した描写に全て重なる。この流れの中に先にあげたタンソンヴィル滞在における「私」の部屋が現れるのである。

このようにカイエ 50 後半に一貫して描かれた部屋での回想・瞑想をめぐる断片からも、上述の部屋の描写が担う小説の構造をプルーストが意図していたと考えることができるのではないだろうか。カイエ 50 の部屋の描写は、最終稿カイエ XV とは異なりその世界観を象徴するには至っていないが、部屋の描写に込められた小説を支える構造性の萌芽が存在しているのではないか。新プレイヤード版他の校訂者が指摘する『囚われの女』冒頭との類似性と、筆者の主張するこれらの部屋の描写の構造性への裏付けとして、このカイエ 50 を付け加えることができよ

13）NPL, t. VI, p. 1004.

う。

以上から、タンソンヴィル滞在とタンソンヴィルの部屋の描写のどちらを『見出された時』冒頭とするかは、現段階でそれを決定づけるには至らぬものの、双方に補強点を加えることができた。最後に当初の第二の疑問であった、タンソンヴィルの滞在を冒頭とするならば、部屋の描写による機能（構造性や世界の象徴）は存在するのか否かという問いを検討したい。その際には先にも挙げた、なぜ散歩中のジルベルトとの会話が部屋の描写が挿入されることによって二分化されているのか、またなぜ二つの方の統合が示されたにも関わらず、強調されるのは主人公の才能の欠如の自覚と悲嘆であるのか、という問いに対する仮説を提示することができるであろう。

冒頭における部屋の描写の機能考察：コンブレー１・２と二分化されたタンソンヴィルの対応

その仮説とは、二分化されたタンソンヴィル滞在が、就寝の悲劇という無意志的記憶[14]を中心としつつもその他は意志的記憶であり、断片的で限定的なコンブレー１と、マドレーヌの挿話というレミニサンスにより十全によみがえった、総体的なコンブレー２の構図と対を成すよう構成されたのではないか、というものである。この仮説により、タンソンヴィルの部屋はコンブレー２冒頭を締めくくるレオニ叔母の部屋と同様の位置づけとして、部屋の描写による構造や世界の象徴としての機能も存在すると考えることができるのではないだろうか。以下上記仮説を検討したい。

	コンブレー	タンソンヴィル
	①不眠の夜の回想	
1	②就寝の悲劇（無意志的記憶） 「私の部屋」（※幻燈で破壊） （不眠の夜の回想）就寝の悲劇以外は意志的記憶 ⇒マドレーヌの挿話によるレミニサンス（文学的啓示への道のりを示唆）	①不眠の夜の回想 ②ジルベルトとの散歩（告げられた二つの方の統合） 「私」の才能の欠如の自覚・追体験の不能・嘆き
2	コンブレーの町の描写 ③レオニ叔母の部屋（外界の象徴） コンブレー２の物語開始	タンソンヴィルの住まい ③「私」の部屋の描写（外界の象徴、文学的啓示を暗示） ジルベルトとの散歩（アルベルチーヌ、サン＝ルーの同性愛的側面） 『見出された時』の物語開始

14）就寝の悲劇は、無意志的記憶（感覚的刺激により喚起された過去と定義）である小説冒頭不眠の夜の回想に現れたコンブレーの部屋の描写に対応していることから、無意志的記憶と考えられる（NPL, t. I, p. 6）。

タンソンヴィル滞在のエピソード中の『見出された時』の主要テーマに関する構図は、以下のように表すことができる（表参照）。

最終篇では①不眠の夜の部屋の回想の枠組みから始まる。そして②散歩中のジルベルトとの会話により『失われた時を求めて』の主要テーマである二つの方の統合が告げられるも、それは私自身の発見ではなく、むしろ「私」の才能の欠如による悲嘆や追体験の不能が強調される。しかし③挿入されたタンソンヴィルの部屋の描写では、コンブレーの教会の鐘楼が「場所と歳月の隔たりを際立たせながら」そのガラス窓に姿を現す。それは最終的に「私」を創作活動へと向かわせる「時」の啓示であり、すなわち文学創造への真の啓示が暗示される。

これに対し、コンブレー１では、①不眠の夜の回想で記憶が喚起された後に、②就寝の悲劇を中心とした過去が語られる（「コンブレーでは［...］寝室が心配事の辛い固定点になるのであった」（NPL, t. I, p. 9）。そして「コンブレーにかんして、就寝の悲劇とその舞台以外のものがすべて私にとって存在しなくなってから、すでに長い歳月がたっていたが」（NPL, t. I, p. 44）とあるように、就寝の悲劇以外の記憶は失われていたという限定的な状況が示される。それは、その直前の文言、「永久に死んでしまったのか。そうなっていたかもしれない」（NPL, t. I, p. 43）により、端的に表されている。しかしよく知られるマドレーヌの挿話によるレミニサンスにより、コンブレーが十全な生きた過去として想起される。それによりコンブレーの町が遠くから、近くから描写され、その描写の最後は③レオニ叔母の部屋の描写によって町が総括的に象徴されることで締めくくられる（「これらの田舎の部屋が［...］私たちを魅了するのは、さまざまな美徳や、知恵や、習慣など、秘められた、目に見えない、過剰な精神生活から発散し、空気中にただよう無数の匂いによってである」（NPL, t. I, p. 48-49）。その後コンブレー２、すなわち十全な過去としてのコンブレーの物語が始まる。

①から③の対応を鑑みれば、タンソンヴィル滞在１と２が住まいや部屋の描写によって区切られ、部屋の描写のすぐ後ではないものの、タンソンヴィルの部屋から見えるコンブレーの教会の描写の少し後に『見出された時』のテーマである、ゴンクールの日記に触発された主人公の文学創造へとつながる考察が始まること、さらにタンソンヴィル滞在１において主人公の才能の欠如と追体験の不能が強調された後に、結末の大団円の希望が暗示されるという構図が、限定的な記憶であるコンブレー１とレミニサンスにより十全によみがえった過去の物語が始まるコンブレー２に対応するといえるのではないだろうか。

もちろん、全く同様という訳ではない。タンソンヴィル滞在１には部屋の描写は存在せず、１と２をつなぐマドレーヌの挿話のようなレミニサンスもなく、住まいや部屋の描写は唐突に挿入されている。しかし、それぞれコンブレーとタンソンヴィルでの物語による要請を鑑みれば、その違いはある程度説明がつく。

コンブレー１は就寝の悲劇を中心にした物語であり、舞台としての寝室が必要であるのに対し、タンソンヴィル滞在１はジルベルトとの散歩が中心であり、寝室は必要ないこと。またタンソンヴィル滞在２にも短いながらコンブレーの町の

描写に対応するような散歩の東屋としての住まいの描写があること。そして散歩と「一日中過ごした部屋」が舞台であることを考えれば、それ以上の描写は必要ないからである。さらに、コンブレー１の「私」の部屋は、幻燈によって破壊されることで、世界の表象という「私」の部屋としての機能を失っていることも理由として挙げられよう。

また既に述べたように、物語の初めにおいてマドレーヌの挿話のレミニサンスにより主人公の文学的啓示の萌芽が表され、そこに至るまでの道のりが示される必要があったこと。これに対しその実現へと至る最終篇のレミニサンスは、ゲルマント大公夫人のサロンにおける一連のレミニサンスまで取っておかれるべきものであったことも理由と考えられる。ゆえに最終篇における文学的啓示への希望はタンソンヴィルの部屋の描写において暗示されるにとどまるのであろう。

上記の考察により、『見出された時』の冒頭がタンソンヴィル滞在、タンソンヴィルの部屋、そのどちらの説であっても、タンソンヴィルの部屋の描写の役割は、主人公―語り手のタンソンヴィルの世界を提示し、象徴するものであるといえるのではないだろうか。同描写はコンブレー２冒頭をしめくくるレオニ叔母の部屋の描写同様に、タンソンヴィル２の冒頭を成すことで小説の構造を担っているのではないか、として本論を締めくくりたい。

（大阪大学助教）